

# 花火師たちの里・<sup>せいないじ</sup>清内路の手づくり花火(長野県)

中部圏には、伝統と結びついた「あかり」と関連の深い豊かな文化が数多くあります。また、広範な光関連産業の発展のなかで、最先端の光に関する技術を利用した新しい様々な文化が育まれています。

調査季報「中部圏研究」では、こうした中部圏における「あかり」と関係の深い文化をシリーズで取り上げ、守っていききたい中部圏の文化、伝統文化と新しい文化の融合、新しい文化の動きなどについて、多面的に紹介していききたいと思います。

今号では、長野県の「清内路の手づくり花火」を紹介します。

## 夏の終わり、山深い峠の里で 「花火師」となる住民たち

(財)中部産業・地域活性化センター

客員研究員 坂口 香代子

長野県南部、飯田市から木曾谷へと抜ける峠の道沿いにある阿智村<sup>あちむら</sup>「清内路」<sup>せいないじ</sup>。2009年3月の合併前まで長く「清内路村」<sup>せいないじむら</sup>と呼ばれたこの山里では、8月末から10月初旬のおよそひと月半の間、住民たちが毎夜「花火師」へと変わる。この地域にある神社の秋季祭典で花火を奉納するためだ。こういった奉納花火・伝統花火と呼ばれる手づくり花火の祭りは全国にあるが、住民が火薬から全て製造し、およそ280年、1度も途絶えることなく続いているのは極めて珍しい。実はこの文化が生まれ守られてきた背景には、非常に興味深い地域の姿がある。その姿を紹介し、「清内路の手づくり花火」<sup>せいないじ</sup>の魅力をもひも解きたい。

〔長野県下伊那郡阿智村清内路〕



(阿智村役場清内路支所提供)

## 1 『清内路の手づくり花火』とは

### 住民が花火師となり

#### 280年守り続けてきた手づくり花火

「清内路の手づくり花火」は、現在、清内路にある「上清内路煙火同志会」と「下清内路煙火有志会」という2つの保存会によって製造され、上清内路諏訪神社および下清内路諏訪神社・建神社の10月初旬の秋季祭典でそれぞれ奉納される地域の伝統花火である。花火の種類としては、木枠などで仕掛けをつくり、種々の形や文字が現れるようにする「仕掛け花火」と呼ばれるものだ。

江戸時代、この地の特産物であった煙草と木櫛の行商に出かけた村人が、煙草と交換に花火製造の秘法を三河の国から入手し、1731年（享保年間）に諏訪神社社堂の再建を祝って奉納したことが始まりだと言われている。

特徴は大きく2つ。

1つは、始まりから今まで1度も途絶えることなくおよそ280年の歴史を数えてきたこと。昔は全国に同じような手づくり花火の祭りが多数あったが、花火の製造・打上げの中心となる青年層の流出や火薬類取締法の強化により、その多くは次々と姿を消していった。しかし清内路では、飢饉の年も戦中戦後の混乱の中でも奉納され続けてきたのである。

そして2つ目は、住民が火薬製造の資格免許を

取り、硝石や硫黄、炭などをすり合わせる火薬づくりから行っている点である。今も手づくり花火を伝承している地域は他にもあるが、そのほとんどが火薬を業者から購入している。全てを住民の手で行っている例は清内路を含め3地域しかない。しかも、花ガサ、シャクマ、ブドウ棚、綱火、棚火、手筒、焼字、噴水、神前、大三国など仕掛けの種類が多数あり、歴史が一度も途絶えていないのは、清内路のみである。

1992年には、長野県の無形民俗文化財に指定。1998年の長野オリンピックでは、初めて地域の外で披露され、日本が誇る貴重な伝統行事として閉会式を彩っている。

清内路の人口は、昭和25年ごろまでは2,000人前後あったが、だんだんと減り続け、現在（2010年4月現在）は約650人。しかし今年もまた変わらず住民たちの手によって秋祭りの花火の奉納は行われる予定だ。なぜ清内路では、手づくり花火の伝統を守り続けてこられたのか？ その答えの大きな理由の1つは、冒頭紹介した「上清内路煙火同志会」と「下清内路煙火有志会」という2つの保存会が存在していることにあるようだ。

では、それをひも解いていくために、まずは、清内路という地域の概要と特徴を紹介したい。

## 2 清内路地域の概要と特徴

### 標高640mを超える峠の集落「清内路」

清内路は、長野県の南の玄関口に位置する飯伊地域にあり、東は飯田市、北は木曾郡南木曾町に接する東西9.1km、南北9.3kmのほぼ菱形に近い形をしている地域である。

2009年3月の阿智村との合併によって、現在は下伊那郡阿智村清内路となっているが、それ以前は「清内路村」として、1889年（明治22年）の町村制施行時から120年間の歴史を重ねてきた。さらに歴史を遡ると、この地域からは縄文期の土器が出土しており、古代から人が住む集落が形成されていたと推測されている。

また清内路には、古くから対外交流・交易上、



「大三国」と呼ばれる花火を奉納し、その下で“きおう”清内路の花火師たち。（清内路支所提供）

重要な街道があった。約500年前（室町時代・永正年間）に開設されたと伝わる伊那街道清内路道は、公用物継立の道であり、朱印状を持った役人が通行する一方で、善光寺詣りや御嶽行者などの旅人が歩いた信仰の道としても重要な道だと言われている。現在は、清内路地区をほぼ南北に国道256号線（中津川、茅野線）が通り、車で飯田から中央アルプスを越え妻籠・馬籠へ、さらには岐阜県中津川方面へと抜ける基幹道路となっている。

### 昔も今も自然の恵みを宿す地域

清内路のもう一つの特徴は、標高が640～1,636mと高く、中央アルプスの一角を占める自然豊かな地域であること。

「神宿る木」と言われる樹齢300年以上、樹高20m、幹周り7m余りの巨大な古木「小黒川のミズナラ」（おおまき）は、この種としては最大級のもの。また、ペリー来航時に移植されたと伝わる「黒船桜」、幹周り3m32cmの「説教所の桜」、推定樹齢200余年の「清南寺・夫婦桜」など、桜の名所としても人気が高い。さらに標高1,000mの蛇ぬけ沢山に根を張るやまぼうしなどもあり、貴重な自然遺産が数多く存在している。

実は、日本での発祥の地が清内路だという樹木もある。1本で赤・白・ピンクと咲きわたる八重咲きの「花桃」がそれで、木曾発電株式会社社長であった福沢桃介（福沢諭吉の娘婿）が大正時代に留学先のドイツから持ち帰り、これを清内路の住民が少しずつ増やし、ここから全国へと広まっていったという。

清内路はまた、多くの清水が湧き出ることでも知られ、昔から旅人の喉を潤してきた。現在、峠道の街道沿いには1～5番まで名付けられた清水の水場がある。

### 「上清内路地区」と「下清内路地区」

そして、清内路の最も大きな特徴が、「上清内路」と「下清内路」という全く違う文化や気質を持つ2つの区（地区）によって形成されているこ



清内路の位置

(清内路支所提供)



国道256号線・清内路峠にある「清内路トンネル」（全長1,642m）。このトンネルが1999年7月に完成する前は、木曾谷へ下りるためには、清内路峠を越える必要があった。（清内路支所提供）

とである。

清内路は自治体組織としては、1889年（明治22年）の町村制施行と同時に清内路村として村制をスタートさせているが、『村制120周年・閉村記念誌』によると、「昔からの慣習に従って、総代と副総代に数人の伍長が参画して、地区行事からはじまり、学校建築、道路費の負担、更に村の行政上の赤字の整理・消防・軍人会・青年会への補助に至るまで、いっさいの業務を地区単位で行っていた」とある。

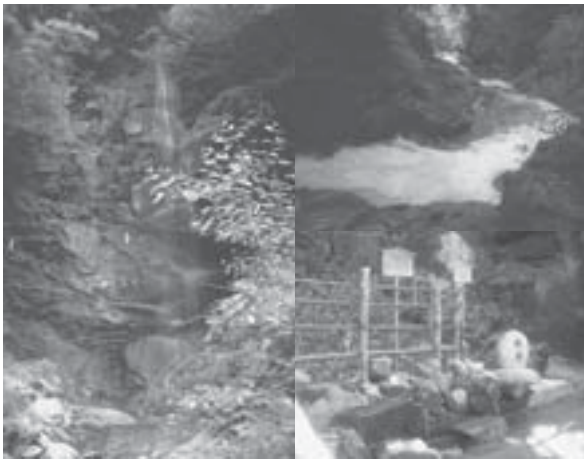
つまり「村は、村長・村会・村役場など表向きの機関として整備された機構を持ちながら、実質的な運営の面では、両区（上・下に分かれる）に



毎年、4月下旬に見ごろを迎えるしだれ一本桜の「黒船桜」。清内路小学校のすぐ隣にある。



昭和40年代ごろから、清内路を通る国道256号線に花桃が植えられ始め、今では「はなもも街道」とも呼ばれている。



(左) 滝の壁面に「不動尊」が現れると言われる「姿見不動滝」。(右上) 悲しい民話も残る「赤子ヶ淵」。(右下) 水量も豊かで2カ所の水場があり、県内外を問わず多くの人が水汲みに訪れる「一番清水」。



県指定天然記念物の「小黒川のミズナラ」。その枝ぶりが特に美しく、この種としては最大級を誇る。

(清内路支所提供)

背負わせたもの」であり、「上・下の地区では村が必要とする経費を負担し、仕事を請け負い、学校建築から土木費・学務委員の日給・学校用木炭に至るまで、両区の財産提供が基本」となっていたのである。当然、「両区の協力なしに村の行政は運営できないという、二重構造の自治体」が生まれ、この制度は、戦後に至っても受け継がれ、ようやくいっさいの村営事業が村の負担で行われるようになったのは、昭和40年代に入ってからだったという。

なぜ、そのような二重構造の村であったのか。それをひも解くには、さらに歴史を遡らなければならない。

## 江戸期、木曾文化が入り込んだ「上」と 飯田文化の影響を受けた「下」

明治維新前の清内路は、徳川氏の直領(天領)で、美濃の国・久々里代官千村平右エ門の支配下にあった。ただ、江戸時代以前の中世の文献が残されていないため、上清内路と下清内路の成り立ちや、どのようにして清内路という1つの地域となったかについてはわかっていない。

住民の言葉を借りれば、とにかくはっきりしているのは、上清内路と下清内路は、文化や生活様式も違えば人の気質も全く違うということだ。今でこそそれほど顕著ではないが、昭和40年代にそれまでの農業依存の生活設計が崩壊をしていくまでは、そこには際立った違いがあったという。

### コラム【清内路の暮らしを支えた煙草生産】

「清内路の手づくり花火」を生む要因となった清内路の煙草生産。その起源は明らかではないが、清内路に残る煙草に関する最も古い資料は、1670年（寛文10年）の「覚」である。その後、元禄年間には葉煙草の栽培が主産業となり、村内のほとんどの耕地で栽培されていたようだ。土質が優良であったため、清内路でできた煙草は口あたりが軽く、口が荒れず、火持ちがよいということが評判で、江戸吉原の遊女たちにも重宝がられ、清内路煙草は一級品の煙草として「花魁煙草」と呼ばれていたという。江戸や京の都への販路も確立し、広く外貨を稼いでいた。現在も清内路の街並みには白壁の蔵が数多く残されており、当時の豊かさがしのばれる。

しかしこの清内路の煙草生産も、明治20年代に入ると変化の兆しが出始める。養蚕のための桑栽培



へと移行が進んだのだ。その原因は明らかではないが、養蚕業の勃興とともに煙草の耕作農家は減少していき、「煙草専売法」の実施により、1909年（明治42年）にはついに耕作が廃止になったと村の歴史は記している。実際には、昭和60年ごろまで細々と煙草生産を行っていた農家もあったようだが、現在は行われていない。

清内路村で製造された明治期の刻煙草包装紙。

（阿智村役場清内路支所提供）



古地図で見る清内路（左が北）。右（南）側の一本の太い道沿いに下清内路があり、二股に分かれた下の道沿いに上清内路がある。（清内路支所提供）

その違いを生んだ理由の1つには地理的要因がある。現在、上・下の2つの集落は車で行けばすぐだが、徒歩しか交通の手段がなかった時代には交流を深めるには困難な距離があった。一方で古くから重要な街道が通っていたことから、他地域

の影響をそれぞれ大きく受けたのである。飯田市に近い下清内路は、小京都と呼ばれた飯田文化の影響を色濃く受け、一方、木曾に近かった上清内路には関東文化の流れを受ける木曾文化が流れ込んだ。

人の気質に関しても、清内路内ではよくその違いが話題に上る。「上清内路は外向きでオープン、下清内路は保守的」なのだという。影響を受けた文化の違いもあったのだろうが、今でも上と下の人口比率は1：2で、下清内路は人口が比較的多かったこともあり、ほとんど地区内で姻戚関係を結んだのに対し、上清内路は木曾との間で姻戚関係を結ぶことも多く、それが気質の差に関係しているのではないかと清内路の人々は考えているようだ。

## 「出づくり」という 農村民俗文化の中で生きてきた 下清内路

また、両地区には、少し前まで生活様式にも決定的な違いがあった。

実は、下清内路地区を歩いていて不思議に思ったことがあった。煙草や養蚕など農業が主産業だったというのに農地（耕地）が近くに見当たらないのである。集落内には白壁の蔵も所々で見られ、ここが標高700mを超える山の上だということを除けば、一般的な農村のイメージからはかけ離れた佇まいの家々が密集して並ぶ。

話を聞くと、下清内路には全国でも珍しい独特の農村民俗文化が存在していたのである。ほとんどの農家が集落内にある家とは別に、「山の家」を持っているのだ。これは「出づくり」と呼ばれるもので、日本民族辞典によると、「生活の本拠となる集落から遠く離れたところに耕地があり、毎日往復して作業を行うことが困難なため、そこに家を建て、一定期間移り住んで農作業を行い、収穫を終えて後、本拠とする村に帰ってくる」という一種の慣行である。

下清内路では、本拠となる集落付近に広い耕地をつくるのが難しいことから、煙草栽培や養蚕、あるいは山畑づくりのために、4月下旬の春の祭りが終わると山の家へ家族全員での引っ越しが行われた。山羊などの家畜はもちろん、家財道具も全て一式持っていく。そして秋の祭りが始まる10月上旬に、再びもとの家へと戻ってくるのである。

煙草に代わって養蚕が主産業として最盛期を誇った大正時代～昭和初めは、下清内路の山の家は102戸を数えたという。昭和50年代に入るといわゆるサラリーマン家庭が当たり前になり、徐々にその姿を消していった。しかし現在でも30軒ほどは残っており、以前のような出づくりの使い方をする家はほとんどないものの、逆に山の家を生活の拠点とする人もいるという。

この出づくりの文化は、下清内路のみに見られるもので、上清内路では一切見られない。

こうした、全く違う文化や気質を持つ上清内路



現在の下清内路地区にある下清内路諏訪神社・建神社へと向かう参道。



下清内路に現在も残る「山の家」。単なる山小屋ではなく、村の家に負けない立派な構えが特徴だ。(清内路支所提供)

と下清内路の2つの区により「清内路」という地域は長く形成されてきたのである。そして、それはそのまま花火づくりにも反映されている。もっと言えば、「清内路の手づくり花火」には、上清内路と下清内路それぞれに先人が守り続けてきた秘伝の製法が存在し、「自分たちの花火こそ1番」という燃えたぎるライバル心がある。車の普及や道路の整備などで地理的に近い存在になってもそれは変わらず、互いにその思いを持つ中で切磋琢磨して技術を磨いて来た結果が、280年という歴史なのである。

### 3 <sup>せいなじ</sup>清内路の手づくり花火の特徴

#### 競い合いの奉納花火

清内路に花火づくりの技術が伝わったのは、江戸時代初期のこと。当時、清内路の暮らしを支えていた特産物の煙草の行商で三河地方を訪れた村人が、煙草と引き換えに花火づくりの技を習得したという。古い歴史を持った伝統花火の中で、特に有名なのが三河地区の「手筒花火」。噴出薬を詰めた筒を手で脇に抱え空中に火の粉を噴出させるものだが、清内路の人々が持ち帰った花火の技法は、おそらくこの花火であったと考えられる。

実際に清内路の手づくり花火が世に出たのは、1731年(享保16年)の諏訪神社再建の時。「手筒」「大手筒」の他に、のろしを起源とするロケット花火「龍勢(りゅうせい)」を3日間奉納し、村中の人々を狂喜させたのが起源とされている。

当初は、上清内路の4組(堀田・土佐・宮・西)と下清内路の3組(中・龍一・本)がそれぞれ独自に手づくり花火を製造し、競い合いながら奉納していた。そして、各組とも長年にわたって改良を繰り返し、秘伝の花火の製法を確立していったと言われ、花火づくりの技法は門外不出のものであったという。

例えば、古老たちの言い伝えによると、下清内路の各組はそれぞれに花火を披露する囀籠(かこいやぐら)（舞台）を持ち、それに花火を仕掛け奉納するのだが、祭典の折には、秘密が漏れないように他の組の囀籠に入ることが禁じられたという。また、他の組へ婿養子に出るような場合には、「その組の花火の秘法は一生明かさぬ」と誓いをたてたという話も伝わる。それが事実であったかどうかは定かではないが、清内路に残る明治時代の秘伝書が火薬の調合比率を暗号で記していること、また江戸時代の度重なる飢饉の年や戦中戦後に火薬その他の物資が欠乏し製造が困窮した中でも、「氏子の花火」と言われる「大三国」(大筒花火)だけは奉納されるなど、どんな状況下においても1度も絶たれることなく続けられてきたことから、清内路の人々の花火への思いは非常に熱いものだったこと



下清内路諏訪神社境内にある建物内に展示されている「大三国」の筒。  
(清内路支所提供)

がわかる。

#### 住民が火薬製造の資格免許を取得

記録によると、清内路の奉納花火は、明治末期までは7月22、23、24日の3日間行われており、その後、上清内路は10月6日に、下清内路では10月7、8日と改められた。そして現在は、上清内路は10月6日のままだが、下清内路は花火の担い手が取り組みやすいように仕事が休みとなる10月の体育の日の祭日となっている。

明治中期までは、仕掛け花火だけでなく、打上げや龍勢なども清内路内で製造していたようだが、明治30年代に入ると龍勢の危険が度々問題になるとともに火薬の取り扱いが厳しくなり、龍勢は廃止され、打上げの玉は飯田市の業者から一部を買い入れるようになったという。

そして戦後、若者の村外流出とさらなる火薬類取締法の強化により、清内路の手づくり花火もその継続に危険信号が点ようになる。そこで、何よりも継続を第一に考え、それまでの組単位で行うものから上清内路、下清内路でそれぞれ1つにまとめ維持に努める組織再編の努力が重ねられた。1974年(昭和49年)には、「上清内路煙火同志会」と「下清内路煙火有志会」のもととなる保存会が上と下にそれぞれ結成され、引き続き互いに切磋琢磨していく中で清内路の花火を伝承していく現在の形が生まれたのである。

またその一方で、上清内路、下清内路ともに、あくまでも火薬づくりから全て自前で行うことに

はこだわり、それぞれ住民が正式に花火製造・火薬取扱いなどの国家試験に挑み、見事に30名ほどが資格を取得。先人たちの手づくり花火への思いを継承することに努めたのである。

### 「上清内路煙火同志会」と 「下清内路煙火有志会」の違い

「上清内路煙火同志会」と「下清内路煙火有志会」は、火薬の製造に始まり、花火の仕掛け、打ち上げに至るまで、全てを住民が行うという清内路の手づくり花火の根幹の部分では全く同じだが、そのメンバー構成から、花火づくりのやり方、さらには花火の奉納の仕方に至るまでさまざま違いがある。

まず興味深いのがメンバー構成の違いである。「上清内路煙火同志会」は、明確な決まりとしてあるわけではないが、各世帯から1人以上の参加が慣例化しており、現在60名の会員がいる。一方、「下清内路煙火有志会」は、その名の通り有志の集まりで、メンバーは現在24人。これは祭り

の運営の仕方が上と下で違うことがその背景にある。下清内路の秋祭りは、区全体で取り組む祭りになっており、区会が祭りを仕切り、その下部組織である祭典委員会が寄付集めなど実際の運営を行う。その中で花火の奉納に関してのみ煙火有志会が請け負う形になっているのである。それに対し、上清内路では、祭りに関する全般を煙火同志会が担う。つまり、プログラムづくりから始まり、寄付集め、花火製造、当日の運営全てを煙火同志会が行うのだ。

また花火づくりにおいても違いがある。詳しくは後の「清内路の手づくり花火の内容」で紹介するが、火薬づくりに使われる道具がまず違う。そして祭り当日の花火の奉納の仕方にも、それぞれ独自に受け継がれてきた工夫があって面白い。

道具の違いや奉納の工夫を含め、実際、上清内路と下清内路でどのように花火づくりが行われ、秋祭りで奉納されているのかを紹介しよう。

## コラム

### 【花火事業所として認可を受ける保存会】

「打上げ花火等（打上げ花火と仕掛け花火）の生産額日本一」はどこか。実は清内路のある長野県である。7月28日～9月2日までの約1カ月間連日連夜打ち上げられる「諏訪湖の花火」をはじめ、規模の小さいものもすべて含めると長野県の夏の花火大会は110カ所にのぼり、需要の多さとともに、精巧で精密な技術力が全国から高い評価を受けていることがその要因だと言われている。この長野県には、花火をつくる事業所が16あり、うち14は花火製造を主事業とする煙火店、いわゆる花火屋さんである。そして残りの2つが清内路にある2つの花火保存会なのである。



阿智村役場清内路支所の職員・櫻井佑介さん。下清内路煙火有志会の1人だ。



## 4 清内路(せいのないじ)の手づくり花火の内容

### お盆を過ぎると、清内路にやってくる「煙火の季節」

上清内路、下清内路ともに、祭りの本格的な準備が始まるのは、8月下旬。まず、花火に使う竹の伐採が行われる。

竹を選ぶうえで重要なのは、まっすぐで丸みがあること。竹は、火薬を詰める筒の役割を担うからである。上清内路では近年、この竹に代わり「紙筒」を使用することも多い。安全性と安定性を考えてのことだ。一方、下清内路はあくまで竹に火薬を詰める伝統的な技法を貫いている。

伐採された竹は、いったん湯通しされる。茹でて乾燥させることで、割れにくく強度のある筒になるのだ。

清内路に煙火の季節を告げるもう1つの作業が炭づくりである。火薬の原料の1つとなる木炭を焼くのだ。まだ夏の残暑の中、汗で顔を濡らしながら炭づくりは行われる。木材は清内路にある山ツツジ、サワラ、桐が使われ、木の種類によって火力が異なる炭ができるという。竹もそうだが、こういった花火づくりの原材料が豊富に存在する地域性も、清内路で手づくり花火が今も継承される大きな要因の1つだろうと思う。

### 約1カ月、毎夜、続けられる火薬づくり

9月に入ると、毎夜7時半をすぎたころ、上清内路煙火同志会、下清内路煙火有志会のメンバーがそれぞれの火薬倉庫へと集まってくる。花火づくりは全て自分の仕事を終えてからの作業だ。

ここから「すり」と呼ばれる火薬製造の作業が毎夜、約1カ月間にわたって続けられる。炭に硫黄、硝石を混ぜ合わせて練り上げ、なめらかになるまで時間をかけて丁寧にすり続けられるのだ。

上清内路と下清内路では、このすりに使われる道具が違う。上清内路は、大きなすり鉢とすり漕ぎ棒を使い、下清内路では、舟形をした「薬研」



清内路の人々に花火づくりの始まりを告げる竹切りの様子。  
(清内路支所提供)



竹の湯通し風景。先人の知恵が継承されている。  
(清内路支所提供)



(左) 下清内路での「すり」と呼ばれる火薬製造の作業風景。(右)「薬研」と呼ばれるすりに使われる道具。  
(清内路支所提供)

と呼ばれる道具（写真）が使われる。ここにもそれぞれの伝統が色濃く反映されているが、花火づくりのほとんどがこの地道な「すり」作業に費やされることは同じ。その苦労を上・下それぞれの保存会の会長、原文雄さんと櫻井久さんに尋ねると、2人は顔を見合わせ、原さんが「そりゃあ、大変だよ。だけど火薬の善し悪しはすった時間で決まる。最後にうれし涙を流せるかどうかは、本当に努力したかどうかだから」と答え、櫻井さんがそれに大きくうなずく。清内路の"花火師"たちにとって、すりを毎夜ひたすら続ける中で、先人たちの思いを受け継ぎ、祭り当日へ向け徐々に気持ちを高めていくのだ。

## 9月中旬から下旬、 竹の縄巻きと仕掛け花火の準備へ

9月中旬を迎えると、ゆでて乾燥させた竹に縄を巻く作業が行われる。縄巻きは、万が一、竹が爆発してしまった時に、被害を最小限に食い止めるためのもの。

そして9月下旬、火薬づくりがひと段落すると、いよいよ仕掛け花火づくりに入る。清内路の手づくり花火の特徴は、花ガサ、巴車（シャクマ）、ブドウ棚、綱火、棚火、手筒、焼字、大三国といった伝統花火だけでなく、噴水、メリーゴーランドなどの新作も多数あり、奉納される仕掛花火の種



三国柱の縄巻き風景。隙間なく巻くには経験と助け合いの精神がある。1人ではできないこういった作業が、伝統を伝える側、受け継ぐ側をうまく結び付けている。  
(清内路支所提供)

類が多いこと。上清内路と下清内路には、それぞれ独自の技術と出し物があり、その粋を結集して、毎年10種類を超える複雑な仕掛け花火が奉納される。もちろんその分、大変なのは言うまでもない。しかし「毎年、今年は去年より"いい花"咲かそうと思っちゃうんだよね」と櫻井久さんは笑う。

## かみ しも 上・下それぞれ

### 花火会場の特徴を生かした仕掛けを準備

上清内路では上清内路諏訪神社が、下清内路は下清内路諏訪神社・建神社がそれぞれの花火会場となるが、両神社がそれぞれ持つ立地条件も、上・下の出し物の違いに少なからず影響を与えている。

上清内路にある「上清内路諏訪神社」は周辺に民家がなくて開けた場所にあり、境内も広い。そこでその広さを最大限活用した大掛かりな仕掛け花火が奉納されるのだ。その代表的なものが、大きな木馬が回転し、時間差でさまざまな花火を繰り出しながら火の粉の雨を降らす「メリーゴーランド」と、170m離れた対岸へ向けて蝶などをかたどった仕掛け花火が飛ぶ「綱火」である。それぞれ非常に豪快で大人にも子どもにも大人気だ。

一方、下清内路には「下清内路諏訪神社」と「建神社」という2つの神社があり、その2つの社殿が1つの境内に設置されている。またかつて華々しく行われていた農村歌舞伎の大舞台も境内に残されているため、かなり狭い。しかも境内は民家が密集して建っているすぐそば。

そのため下清内路では、祭り前日に「舞台」と呼ばれる囲櫓が3つ建てられ、その上で花火が披露される仕組みになっている。この囲櫓での花火の奉納は下清内路のみに見られるものだ（コラム【手づくり花火を"演じる"舞台「囲櫓」】参照）。

さらに、下清内路では、仕掛け花火に点火する役割を担う「綱火」を走らせるのが特徴。例えば大三国。諏訪神社に奉納する場合は、諏訪神社から、建神社に奉納する場合は建神社から火をもらう形で囲櫓まで綱火が走り、「導みち」と呼ばれる導火線に点火し大三国に火がつくのだ。狭い中で成



上清内路諏訪神社境内。この境内自体も広いが、写真には写っていないが右側が清内路川が流れる谷で、その向こうの対岸の山も含めて花火会場として利用できる。



上清内路諏訪神社に奉納される仕掛け花火の「メリーゴーランド」。大掛かりで複雑な仕掛けが施されている。  
(清内路支所提供)

### コラム【仕掛け花火を“演じる”舞台「かこいやぐら 囀

下清内路の仕掛け花火は、昔から下清内路の花火職人が「舞台」と呼ぶかこいやぐら囀かこいやぐらの上で演じられてきた。3基の囀は、下清内路の3組（中・龍一・本）がそれぞれ独自に手づくり花火を製造し競い合いながら奉納していたころからのもので、今も各組の持ち物であり、下清内路煙火有志会が祭りに際してそれを借り受け、現在の奉納が行われている。

この江戸時代から伝わる囀は、いずれも漆黒の柱で釘1本使わぬ組み立て式である。また祭り本番の暗闇の中ではよく見ることはできないが、美しい格子と飾りが施されており、まるで芝居が演じられる舞台のようだ。下清内路の花火師たちは、この舞台で、まさに仕掛け花火を“演じる”のである。



(左) 普段は駐車場となっている囀の設置場所の1つ。(中) 祭り前日の囀の組み立て風景。(右) 出来上がった囀。



下清内路諏訪神社・建神社境内。この小さな境内の奥に諏訪神社と建神社2つの社殿があり、左に見えるのが元歌舞伎の舞台。この写真の手前に民家が密集している。



下清内路諏訪神社・建神社で、囿檜の上で披露される仕掛け花火の「巴車（シャクマ）」。花火の下に見えるのが囿檜で、美しい格子と飾りが施されている。

(清内路支所提供)



「導（みち）」づくりの様子。綿に火薬をまがし、和紙で巻いていく。

(清内路支所提供)

功させる苦肉の策で生まれたものだが、これによってそれぞれの仕掛け花火が「花を咲かせる」まで、観客はわくわくドキドキ感の中に包まれることになる。

清内路の手づくり花火は、上、下が、それぞれの条件の中で技術を磨き育んできたもので、今ではその条件を逆に生かした演出が大きな魅力になっている。

## 祭り当日、 ほぼ1日かけて火薬を充填

そしていよいよ迎える祭り本番。上清内路は、10月6日の上清内路諏訪神社秋祭り、下清内路は10月第2月曜日（体育の日）の下清内路諏訪神社・建神社秋祭りが、清内路の花火師たちにとって1年に1度の晴れ舞台だ。その日、清内路は1年で最も忙しく賑やかな1日となる。

祭り当日は、朝早くから、筒への火薬詰めおよび仕掛け花火の骨組みに火薬と火花のもとになる鉄粉をセットしていく作業が行われる。これは上も下も同じだ。鉄粉は酸化しやすく、酸化が進むと美しい花を咲かせない。そのため火薬詰めは祭り当日に行われるのである。

この火薬詰めがまた、非常に時間のかかる作業である。隙間があったり詰めすぎたりすると爆発する可能性もあり、筒の中に満遍なく火薬が行き渡るように、「慎重に少しずつ火薬を入れては詰め棒を差し入れ、金槌でたたく」という作業をひたすら繰り返す。大三国の場合、8時間ほどかけてようやく火薬詰めが終わる。

## 「オイサ、オイサ」のきおいととも 始まる手づくり花火の祭典

午後6時、手づくり花火の会場となる神社に多くの人が集まってくる。お正月に帰らずとも、この祭りの日には里帰りするという人も少なくなく、親戚や知人など10人を超える客人がある家も多いという。

点火の予定時刻は、10月6日の上清内路、10月体育の日の下清内路とも夜の7時。それまで、清



祭り当日、夜の祭り本番に向けて進められる準備の様子。

(清内路支所提供)

内路を練り歩いてきた子供の山車や祭り道具の行列が神社へと入り、続いて奉納の太鼓が打たれ、花火の点火を待つのである。

そして午後7時少し前、「オイサ、オイサ」という力強い"きおい"のかけ声とともに、花火師の正装である法被を身に付けた花火師たちが神社へとやってくる。"きおい"とは、仲間を励まし、自分自身にも気合を入れる清内路の花火師たちが常に使うかけ声だ。

最初に打上げ花火が打上げられる中、仕掛け花火の最終準備が進められる。

### 滝のように流れ落ちる火飛沫の中に 勇んで飛び込む花火師たち

宵闇が本格的な暗闇になるころ、神社内のライトが消され、いよいよ仕掛け花火へと火を渡す綱火に着火。轟くような音と眩しい光が織り成す手づくり花火奉納の始まりだ。

上清内路煙火同志会、下清内路煙火有志会の花火師が、花ガサ、ブドウ棚、シャクマ、噴水、メリーゴーランド、棚火、神前、黒船桜など、技術の粋を結集したさまざまな仕掛け花火の花をそれぞれの祭り当日、次々と咲かせていく(写真参照)。

それとともに、滝のように流れ落ちる火飛沫の中に勇んで飛び込み、「オイサ、オイサ」のかけ声とともに肩を組み輪になって流れ落ちる火花を浴び、無病息災を祈る花火師たち。清内路の手づくり花火のもう1つの見どころだ。

そして、夜10時まで続くこの花火の祭典のクラ

イマックスを飾るのが、上清内路(10月6日)、下清内路(10月体育の日)どちらも「大<sup>だいさんごく</sup>三国」と呼ばれる大筒花火である。

### "氏子の花火"「大<sup>だいさんごく</sup>三国」

「大<sup>だいさんごく</sup>三国」は、清内路で披露(奉納)される数ある花火の中でも、上清内路・下清内路とも、「氏子の花火」としてその最後を飾る特別な花火である。その名の由来は諸説あり、花火の発祥の地・中国の魏・蜀・呉の三国から来ているとも、三河から伝わったからだとも、また日本・中国・インドの三国で1番優れている(世界一素晴らしい)ものとして名付けられたとも言われるが、ともかく清内路では「280年の歴史の中で一度も途絶えることなく奉納され続けてきた花火として、歴代の花火師たちの特別な思いが込められてきた花火」なのである。例えば上清内路では、その製造責任者は「棟梁」と呼ばれ、非常に名誉な役職として受け継がれてきている。

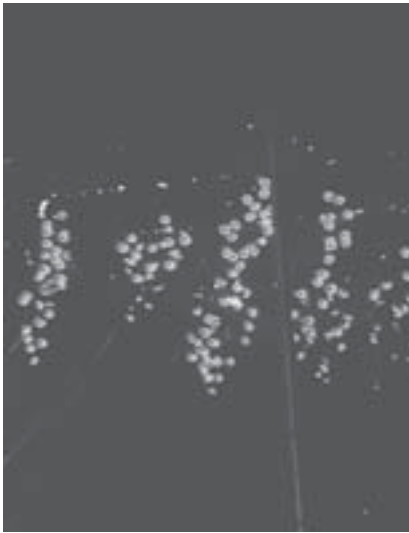
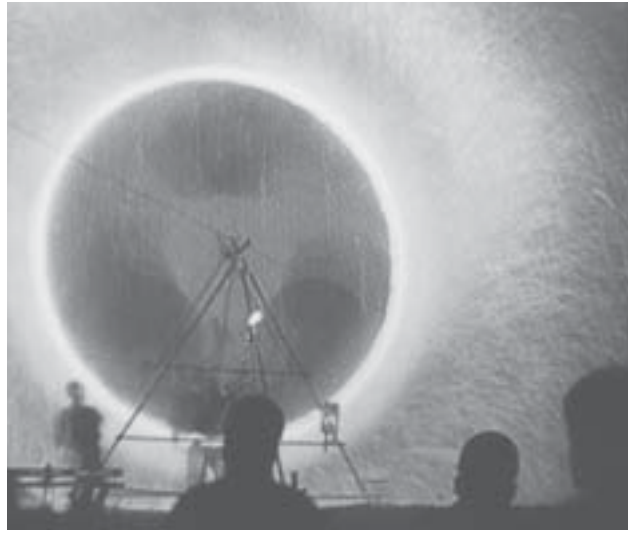
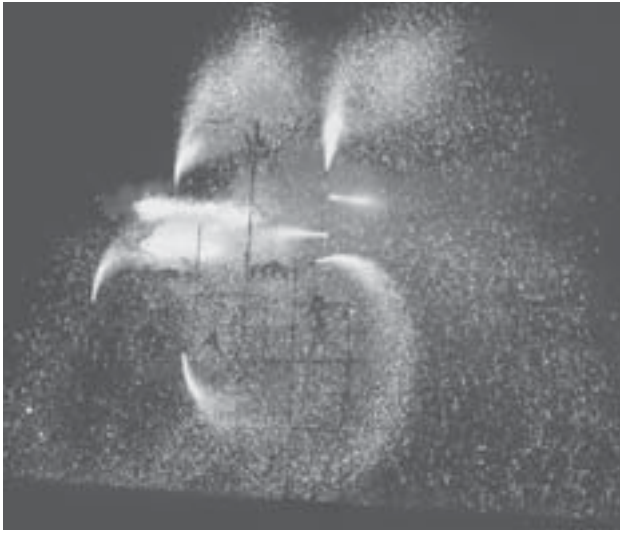
高さ10mの三国柱と呼ばれる柱の頂点に2層あるいは3層に火薬が充填された1本の大筒が取り付けられ、そこから夜空に火花を高く吹き上げ、火飛沫がまさに滝のように流れ落ちてくるその様は、まさに圧巻である。

### 手づくり花火の伝統を守ることは 「先人に挑み続ける」ということ

祭りを終えると、清内路はまたいつもの静かな山村へと戻る。上清内路も下清内路も、それぞれ

#### 資料1 清内路の手づくり花火の概要

	上清内路区	下清内路区
開催日	10月6日	10月の体育の日の祭日
開催場所	上清内路諏訪神社境内	下清内路諏訪神社・建神社境内
準備期間	8月下旬～祭り当日	8月下旬～祭り当日
奉納するメンバー	「上清内路煙火同志会」 60人(内、女性2人、中心世代は50代60代) ※基本は各世帯から1人以上	「下清内路煙火有志会」 24人(内、女性3人、中心世代は30代40代) ※有志の団体
祭りの組織形態	祭りのプログラム、寄付集め、花火製造、祭りの運営全てを同志会が行う	区会(祭りの運営)→祭典委員会(寄付集め)→有志会(花火製造)という組織形態の中で行う



清内路の手づくり花火奉納の様子。写真中央左の幻想的な青い光を放つ「ブドウ棚」は清内路でしか見ることができない珍しい花火。写真下の両端は大三国。また、写真ではよくわからないかもしれないが、清内路の花火師たちの法被は、常に穴だらけ。自分たちでつくった花火が豪快に火の粉を吹き上げる中に入り、「オイサ、オイサ」とかけ声を発しながら肩を組んで大地を踏みならし、「誇り」を身にまとうからだ。  
(清内路支所提供)

たった一夜限りの花火だ。しかし清内路の人々にとってそれは、「明日を生きる力」への“綱火”となってきた。

取材をしていて強く心に残ったのが、この清内路には「挑戦」の心が深く息づいていることだ。清内路で今も「手づくり花火」の伝統が灯され続けているのは、上清内路と下清内路という2つの地域が切磋琢磨してそれぞれの手づくり花火を育ててきたこととともに、その時代時代の花火師たちが常に先人（先輩）の花火師たちに挑み続けてきたからではないかと思う。最も身近な先輩である親が花火を成功させてきたように、自分も成功させたい、去年より今年、もっと感動してもらえぬいい花火をつくりたい。その思いを代々受け継いできたことが非常に大きいのではないかと思う。

それを受け継いだのは、「守るべきは何で、守るために変えていくべきことは何か」に取り組んできたからだ。それはもしかしたら意図されたものではなかったかもしれないが、清内路の手づくり花火の歴史は、「守るべきは何で」に取り組んだ歴史だったと思う。

清内路の何より「守るべき」は「全てを自分たちの手でつくる」ということだった。自分でつくるから先人の苦労がわかる。全てをつくるから花火師としての誇りが生まれる。誇りがあるから次の世代へ引き継がなければならないと思う。その使命があるからまた頑張れる。

そしてそのために「変えていくべき」は、受け継ぐ人が受け継ぎやすい仕組みを時代に合わせてつくることだった。例えば、組織の見直しであったり、開催日の変更であったり、安全を考えた材料変更であったり。近年は、全国の伝統花火保存会が集う「全国伝統花火サミット」にも毎年参加し、全国の花火師たちと交流を深める中で、それぞれの技術も積極的に学び、技術を磨いている。

守るべきものを守るために柔軟な対応もとってきたことが、清内路の手づくり花火を今に伝えている大きな要因ではないかと思うのだ。

こうして280年の長きにわたって受け継がれて

きた清内路の手づくり花火も、今、「これまでで最大のピンチを迎えている」（上清内路煙火同志会会長・原文雄さん）。高齢化・人口減少という難問だ。

次のインタビューで、「清内路の手づくり花火のこれから」について紹介したい。



## 5 『清内路の手づくり花火』の課題とこれから

### インタビュー



上清内路煙火同志会会長 原文雄さん（写真左）  
下清内路煙火有志会会長 櫻井久さん（写真中央）  
下清内路煙火有志会副会長 原和寛さん（写真右）

### 清内路の手づくり花火は そこで暮らす人々の「誇り」

—まず、花火の全てを住民の方がつくられていることに驚きましたが、清内路の手づくり花火とは、清内路の人々にとって、どのような存在なのでしょう。

原（文）「どえらい楽しみ」というのが、共通して持っている思いだと思いますね。特に昔、今のような娯楽なんてなかった時代、大げさでもなんでもなく、1年に1度、この花火があることが、生きが이었다。そういうものを280年も前の先人がつくり上げてくれ、それを今も伝承しているということに対して、清内路の人全員が誇りに思っている。清内路の手づくり花火はそういうものだと思います。

櫻井 そう、まさに「誇り」なんでしょうね。もちろん自分たちが楽しみ、好きだからやっているのだけれど、でも「ただ好きだから」では続いて来なかったと思います。「清内路の宝」だと思っているから残そうという努力もできる。清内路では、かつて農村歌舞伎や能も非常に栄えていましたが、現在は、お面や回り舞台は残っているものの、その文化は途絶えてしまっています。その中

で手づくり花火だけは1度も途絶えることなく受け継がれてきた。それだけこの花火が人々の心を捉える魅力をもっているからだろうと思います。原（和）今、「清内路にいる理由が花火」だという人は少なくないですよ。僕の場合は長男だからここに残ったというのはあるけれど、花火をつくって人にも自分にも感動を与えられるというのは、何ととっても誇りであり楽しみだから。

### 思いが伝わらないと 技術は伝承されない

—1年に1度、“花火職人”となる上で、最も苦労される点はどこでしょうか。

櫻井 技術的なことはもちろんいろいろあるけれど、1番は花火づくりを始めた当初、嫁さんから「花火ばかりやって」と言われ続けたことかな（笑）。私は名古屋での会社員生活を経て、31才で家族とともにUターンしてきたのですが、私のように子どものころに見た清内路の手づくり花火の光景が忘れられなくて、自分も将来絶対にやりたいと思って育った地元のものにとっては、仕事を終えてから、そして休日に花火づくりをやることに違和感はないし、作業は大変だけど、だからこそあんな花火をつくれるとわかっているから、それほど苦じゃない。でも外から来た人にはそんなことわからないですよ。第一、花火なんて業者がつくるものだと思っているから（笑）。でも、1度、実際に花火の奉納を見てもらったら、「ごくろうさまでした」と言ってもらえた。今は「しょうがないね」と笑っています。

原（文）それは、みんな同じだね（笑）。清内路の花火づくりを知らない人にとっては「何で？ どうしてそこまでやるの？」と思うよね。でもそれが楽しみに変わるところが、清内路の手づくり花火の良さなんですよ。

技術的なことで言うと、毎日やっているわけではなく、年に1回のことだから、うまくするにはやはり年数がかかる。特に、火薬の充填は、年に1日だけの作業。安全がかかっているもっとも重



清内路に暮らす人々にとって、手づくり花火の奉納は、娯楽が発達した今も「どえらい楽しみ」である。  
(清内路支所提供)

要な作業だから、みんな本当に真剣ですよ。時には怒鳴り声飛び出す時もある。だからこそ、人間関係というか、「和」が非常に大事。ほぼ1カ月をかける地道なすり作業の期間には、もう1つ重要な意味があるんですよ。毎夜の作業を終えると、酒を酌み交わしながら花火談義に花を咲かせるのです。そうしてお酒を飲みながらいろいろなことを伝え、受け取る側の声も聞く。思いが伝わらないと技術も伝承されないから。もっとも、嫁さんには「また飲んできて」と叱られるけどね(笑)。

## 花火を継承していく 仕組みづくり

—これまでも、幾度か伝承の危機があったようですが乗り越えてこられました。今度の高齢化による担い手不足という難関に対しては、具体的に考えておられることがありますか？

原(文) 本当に難関で、今のままではいけないのは確か。現在、上清内路では、ここに暮らすものの使命としてみんなやるということで60人ほどの組織になっており、そういう意味では、現在も比較的うまく花火づくりができていていると思うけれど、「これから」にはかなりの不安がある。下清内路に比べて人口が半分ということは若者も半分以下ということ。上清内路の現在の花火づくりの担い手は50～60歳。60歳の私が、全体からいう



実際の花火づくりに子どもたちは関われないが、すりを行う「薬研」を洗ったり(上)、花ガサなどの仕掛け花火の骨組みの補修を手伝う(下)なかで、子どものころから花火づくりに親しむ。  
(清内路支所提供)

とまだ若い衆に入っているんだから(笑)。この先、こういう状態でどうやっていくのか、正直まだ暗中模索状態です。

櫻井 実は、下清内路も上清内路のようにもともとはみんなでやっていたんです。しかし、火薬取締法などが厳しくなり試験を受ける必要性が出てきた40年ほど前に1度分裂し、花火をやめかけたのです。その時、今の「有志会」の名の通り、有志が何人か集まり、何としても継承していかなければいけないということで組織をつくり、そこから少しずつ増えていき、現在の形になったわけです。ある意味、今の状況を考えると、花火に専念できる組織がつくれたという点では、良かったのではないかと思います。前は、女性が花火づくりに関わることは許されなかった。しかし今は、下清内路煙火有志会24人中3人が女性です。私の妹

などは、高校を出て花火づくりをやりたいと言ったけれど、女はダメだと言われた時代だから、「どうして?」と怒っているけれど(笑)。ともかく、これからも花火をやろうと思う人たちが、しっかりと先人たちの思いを引き継いで継承していくことができる形をつくっていくことが大事ではないかと思っています。

**原(和)** 僕は、家族という単位が非常に重要なと思いますね。清内路の花火師たちにとって、親の影響というのは、非常に大きい。親が熱く燃えていると自然と子どももそうなる。一番身近な花火職人の先輩である親が子どもにどう伝えていくか。1つにはそこにポイントがある気がします。

**櫻井** もう1つ。今、下清内路には、自給自足を目指して清内路村にやってきた若者がいて、2年前から煙火有志会のメンバーです。その彼が「最近強く感じるのが、生きていく中で1番大事なのは、自給自足をすることではなくて、人のつながり。別に意識しているわけではないが、清内路では花火づくりを通じて、そういう人とのつながりのあるすごく大切な時間を過ごしていると感じている」と言うのです。ここにも1つのヒントがあるかなと思います。

### 【参考文献】

「村制百二十周年・閉村記念誌 清内路村」

(清内路村、2009)

「全国手づくり花火全集」(清内路村役場、1995)

「花火入門」(社団法人日本煙火協会、2009)